

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院学生研究**  
**2023年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学	研究科	日本文学	専攻
<b>研究代表者</b> (2024年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名		
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 3年		王 羽萌		
<b>指導教員</b>	所属部局・職名		氏名		
	文学部・教授		石川 巧		
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・ <b>人文</b>	・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<b>個人</b> ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	アジア・太平洋戦争期の新聞掲載文芸関連記事の研究				
<b>研究組織</b> (研究代表者 ・共同研究者) ※2024年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名		
	文学研究科・日本文学専攻・博士後期課程・3年(研究代表者)		王 羽萌		
<b>研究期間</b>	2023 年度				
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円				

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、これまでの研究のアジア・太平洋戦争下に掲載された「新聞連載小説」に限ったものを中心に据える視点から、「連載」という形を取るエッセイや評論、リレー式のコラム連載、一回限りのエッセイや掌編小説をも視野を入れて、紙面構成、同時代状況との関わり合いを踏まえた上で、新聞掲載文芸関連記事の全体像を明らかにしていく。さらに、本研究は戦時下のメディアとりわけ新聞というアクチュアリティを引き込むメディアに注目し、アクチュアリティを増幅させる連載という形で文学テクストを分析する。戦後、過去の負の遺産として、プロパガンダや国策文学として一蹴されていたテクストを再度掘り起こすことを目的とする。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ アジア・太平洋戦争 ] [ 新聞メディア ] [ 文芸記事のリスト化 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**①アジア・太平洋戦争期の新聞掲載文芸関連記事のデータ整理及びリスト作成**

戦時下新聞連載小説に言及するものは、主に以下の二つの傾向に大別できる。まず、明治期から現代まで通時的に調査し、その傾向を分析するものが挙げられる。もう一つに、当時生産された言説を取り上げ、それによって織り交ぜられた「プロパガンダ」の言説状況について分析、考察する論考であり、戦時下のメディアそのものに注目しつつ、メディアが政策のもとにどのように機能を果たし、当時の言説一般にどのような役割を果たしたかについて考察したものがある。前者に関しては、「新聞小説」という形態に注目し、明治から昭和まで通史的に研究する高木健夫の研究がまず挙げられる。具体的に、『新聞小説史』(全五巻、国書刊行会、一九七四年一二月～一九八一年一月)、高木編『新聞小説年表』(国書刊行会、一九八七年五月)がある。アジア・太平洋戦争期の新聞小説に限ってみれば、高木は戦時下に発行された新聞を調査し、そこに掲載されていた連載小説をリスト化した。その上で、各作家の創作活動を整理し並列することによって、同時代の言説状況を共時的に構築しようと試みた。これを踏まえて、さらに精緻に調査を行ったのが、奥出健「資料・戦時下新聞連載小説」(『湘南短期大学紀要』十八号、二〇〇七年)である。奥出は高木(前出)のリストを補う形で、「太平洋戦争勃発前の16年初めから19年にいたる」と時期を設けて、当時発行の各紙の連載小説を整理しリスト化した。このように、高木、奥出両氏によって、戦時下の新聞小説連載リストは一定の形をなしている。そして、以上の通時的な研究を踏まえつつ、日中戦争期及び太平洋戦争開戦後の言説状況に焦点を当て、さまざまな言説が飛び交う「場」として、戦時下の言説状況を解明しようとする研究が見られる。これらの先行研究はメディアによる言論統制の状況は大きな背景としてあり、そこで生み出された言説はそれに寄り添い、あるいは反転させる営為をなし、それらに伴って織り交ぜられた「場」そのものが問題化されてきた。

従来の研究は何よりも「小説」テキストに注目している。特に、紙面で指定された場所で定期的に連載された「連載小説」に限る。奥出(前出)が改題部分で述べていたように、「講談速記の連載」などの文芸関連記事が含まれていない。しかし、以上のような「連載小説」の他にも、例えば文学報国会所属の作家たちがリレーの形で書かれた「辻小説」や、ペン部隊の報道員として戦地に赴いた作家たちが書いた戦場報告文などが挙げられる。特に、太平洋戦争開戦後においては、「増産必勝魂」と題するコラムの連載が見られるように、「連載小説」という枠組みだけでは、「連載」の形式を取るさまざまなテキストを見落とす恐れがある。さらに、実際の操作面で言えば、データベースを使用して具体的な「小説」タイトル、あるいは作家名といったタームを入れて検索しても、現在確認した段階ではデータが漏れることも時々見られる。こういったデータ漏れも課題の一つである。

そこで本研究は、立教大学図書館契約のオンラインデータベースを使用し、データ収集・整理をおこなった。具体的に、朝日新聞(朝日新聞クロスサーチ)、毎日新聞(毎索)、読売新聞(ヨミダス)を使用し、それぞれ「縮刷版検索」、新聞紙面検索を行った。調査の日付としては、アジア・太平洋戦争が勃発の1941年12月8日から1945年8月15日敗戦までの新聞紙面を調査し、該当する文芸記事データをアウトプットした。データに基づいて、「刊行日付」「種別」「記事分類」「記事題目・大」「記事題目・小」「著者」「備考」の6項目を設定し、リストを作成した。「種別」には該当する記事が掲載された新聞の刊行頻度(朝刊/夕刊/日刊)情報を記入した。「記事分類」として、評論、連載小説、宣伝広告(演劇、映画、出版情報等)、詩、俳句、短歌、川柳、読み物、エッセイ、挿絵、募集(投稿の呼びかけ)の欄を設けた。「記事題目・大」にタイトル、「記事題目・小」にサブタイトルをそれぞれ記入した。「備考」欄に他の欄には入れないが重要な情報(例えば、異なる作者によるリレー連載の記事がある場合、リレー連載のコラム名)を記入した。上記リストを三紙それぞれ整理して作成した。リストの作成後、各紙言説の特徴の流れを掴めることができ、書き手の動きもより明確に見ることができる。上記リストに関しては、2024年度にさらにブラッシュアップして論文発表する予定である。

**研究成果の概要 (つづき)****②外地発行の日本語新聞の調査——「京津日日新聞」を中心に**

新聞データベースの調査を行なっていく際、当時日本の勢力下に置かれたいわゆる「外地」にも日本語新聞の存在に気づき、日本国内の新聞調査と並行して外地発行の日本語新聞について調査を進めてみた。このきっかけとなったのが、2022年から活動に参加していた「在華日中文学資料研究会」である。中国における日本語文学資料についてみる場合、新聞は重要なメディアである。特に、今まで多くの研究成果が挙げられてきた北京・上海とは異なり、租界の歴史が長く、北京の近隣都市でもある天津に関しては、現地における文学活動や文化人の交流に関する研究が十分に調査されていない部分がある。以上のことを踏まえて、本研究は天津発行の日本語新聞の調査に方向性を変更した(本研究の成果の一部として、国際シンポジウム「戦前戦中における日本文化人の大陸表象とそのひろがり—絵画・書簡・新聞—」(奈良大学、2024年3月2日)で研究発表した。具体的に研究発表④その他:学会発表(2)を参照)。

天津で発行された日本語新聞の状況について、盧溝橋事件以降を中心に調査を進めた。孫曉萌「中国華北地域における抵抗言説と日本のメディア活動——天津『庸報』(1926~1944)を中心に」(龍谷大学大学院社会学研究科社会学専攻博士論文、2022年3月)、曲揚「日中戦争期の華北日本占領区における宣伝と文学」(早稲田大学大学院政治学研究科博士論文、2023年3月)において整理・指摘されている情報をもとに、同時代の資料(早川録鋭『北支!!天津事情』天津出版社、1938年9月、この資料は吉澤誠一郎監修『近代中国都市案内集成』(第23巻、ゆまに書房、2012年12月)として翻刻が刊行されている)を比較しつつ、天津現地で発行された日本語新聞をまとめた。その中では、『京津日日新聞』は総合紙として現地で発行され、多くの読者を擁していたことがわかった。そこで、国会図書館で新聞の紙面データを取り、具体的な紙面構成や内容に関する調査を行った。

前述した①アジア・太平洋戦争期の新聞掲載文芸関連記事のデータ整理及びリスト作成と同じ手順を踏み、国会図書館所蔵『京津日日新聞』(1939.3~1940.8)に掲載された文芸関連記事のリストを作成し、文芸関連記事の全体像について分析を試みた。

まず、天津には日本人が所有する映画館・演舞場など多数存在しているため、『京津日日新聞』紙上、毎日数多くの映画・演劇・レビューの宣伝広告が載せられている。日本で好評を得て天津に巡演するものが多くみられる。そしてこれらの広告と合わせた形で、内地から天津を訪れた文化人の到着記事やインタビュー特集も掲載されていた。このように、経済記事に強みを持っている『京津日日新聞』は「経済面に力を注い」(孫、前出)できたが、本研究が調査した期間において文芸関連の記事が増えていく傾向が見られる。

また、『京津日日新聞』には「月曜文芸」と題される文芸欄が設けられており、週1回の頻度で掲載されていたことがわかった。その名のとおり、月曜の新聞に1面丸ごと掲載される(1939年8月天津大洪水の時はほぼ2ヶ月中断していた)。1939年3月時点、紙面に来津公演の宣伝のほか、映画、演劇、レビューといった演芸関連の評論などが散らばった状態で掲載されていたが、のちに「映画・演芸」という欄が設けられ、天津や内地の映画・演芸情報、映画評論が集中した形で掲載されるようになった。

本研究の調査を通して、『京津日日新聞』は現地の住民と積極的に交流し、現地目線で紙面を構成していこうという意志が見られた。その結果として、文芸記事の拡充にもつながることがわかった。これに基づき、次年度は3月の学会発表の内容を整理し論文として発表すると同時に、引き続き個々の記事をさらに分析し、天津に行き来した文化人の交流を中心に調査・研究を取り組んでいく予定である。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

**① 雑誌論文**

王羽萌「区分をくかきませる」技術——開高健「兵士の報酬」『立教大学日本文学』第131号、2024年1月、pp. 31～44

**② 図書**

該当なし。

**③ シンポジウム・公開講演会の開催**

該当なし。

**④ その他**

・資料翻刻:

王羽萌「【資料翻刻】江戸川乱歩「指」原稿」『大衆文化』第29号、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、2023年9月

・学会発表:

(1)王羽萌「服従を問う「言葉」——古山高麗雄「白い田圃」論」第11回東アジアと同時代日本語フォーラムバリ大会×インドネシア日本文学会・次世代フォーラム、インドネシアバリ島、2023年9月1日

(2)王羽萌「天津発行の日本語新聞掲載文芸記事の調査報告——国会図書館所蔵『京津日日新聞』(1939.3～1940.8)を中心に——」国際シンポジウム「戦前戦中における日本文化人の大陸表象とそのひろがり——絵画・書簡・新聞——」、奈良大学、2024年3月2日

・その他:

王羽萌「乱歩蒐集の戦後新聞切抜資料——岩本通信社の新聞切抜資料を中心に」『センター通信』No. 18、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、2024年3月